

「俳句は17音でリズム良く」

戸外に出て自然を目にして

黒羽芭蕉の里全国俳句大会の選者が小学校に出向き直接児童を指導する出前俳句授業が6月24日、大田原市の2つの小学校で行われた。

指導をしたのは、俳句結社「青麗」主宰の高田正子さん。午前中に宇田川小学校（飯村正吾校長、児童数45人）の3、4年生16人、午後に金丸小学校（加藤裕美校長、児童数80人）の5、6年生27人に俳句の作り方を指導した。

高田さんは、1音、2音の教え方と俳句が五七五の17音であること、季節の言葉を入れるという俳句の2つの基本を説明。続いてヤモリ、テナントウムシ、カンナ、ネジバナなど

の画像を見せた。カマキリの画像が映ると児童たちは一斉に「カマキリの子！」と大きな声で答え、高田さんは「みんな、えらいね。ちゃんと子だって分かるんだね」と言って、カマキリは秋の季語で子カマキリは夏の季語だと説明した。また、「ネジバナは右巻きと左巻きがあるんだよ。大人でも知らない人がいるよ」と話すと児童たちは興味深そうに聞いていた。

全員で外に出て夏ツバメやビワの実、アジサイ、アオガエル、バッタなどを見てきた児童たちは、「自分があつと思つたものを17音にする」という高田さんの指導を受け、指を折つ

て俳句を作成。全員の俳句から気に入った句を選ぶ「模擬句会」では「夏ツバメちようときゅうで虫たいほ」の句が最高得点。「夏つばめとんでいいよいい天気」という1音少ない句には「大きく飛んでいい天気」にするという高田さんの優しい指導が入った。

高学年の金丸小の児童には「胸を張って作る」という姿勢についても指導。外に出た際には、構内の雑木林に入り「緑蔭」「木下闇」という言葉を説明、「俳句は自分の詩だから、緑蔭と言つてもいいし木下闇と言つてもいい。自分がこう思つたと決めるのはみんなです」と心構えも伝授。児童の「ねじ花がくるくるくると天をまう」という句は「まう」を「さす」と添削。子どもたちは、わずかな文字で世界が大きく変わる魔法のような俳句の世界を体験した。



指導する高田正子さん(宇田川小)



金丸小の授業風景



ネジバナの画像を見せて(宇田川小)



指を折って(金丸小)



戸外では緑蔭に入つて(金丸小)



外に出ると、季語が「いっぱい(宇田川小)」